

発行

北海道ポーランド文化協会

〒006-0006

札幌市手稲区西宮の沢6条
1丁目16-1-210 佐光方

電話・FAX 011-215-6696
samitsu0204@gmail.com

POLE

第81号 2014.3.20
北海道ポーランド文化協会会誌

創立から26年
刻んだ足跡に
「文化功労賞」



「ポーランド文化功労章」 当協会が受章！



写真1 文化功労章授章式にて（左から）コザチェフスキ駐日大使、筆者、今村能氏、大竹洋子氏、佐藤忠男氏、ズドロイエフスキ文化・国家遺産大臣、上田美佐子氏、ロドピッチ前駐日大使、久山宏一氏

写真：マチェイ・コモロフスキ

去る2013年10月17日、ポーランド共和国より北海道ポーランド文化協会が団体として初めて「文化功労章」を受章しました。安藤会長の代理として大使館での授章式=写真1=に出席しましたので、概要を報告します。

授章式の前には、今春に日本で封切られるポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督による「ワレサ 連帯の男」の試写会がありました。上映前、私は最前列のポーランド大使と並んで着席する前外務大臣の中曽根弘文氏の隣の席に案内され少々戸惑いましたが、授章式のことなど全く念頭にはありませんでした。

上映が終わると、ポーランド共和国文化・国家遺産大臣のボグダン・ズドロイエフスキ氏およびコザチェフスキ駐日ポーランド大使が壇上に上がり、「これからポーランド文化功労章の授章式を執

行う」と宣言されました。改めて少々緊張気味に推移を見守っておりますと、簡単な主旨説明のあと、まずシアターX(カイ)の上田美佐子氏の名が呼ばれ、壇上で大臣が「文化功労章グロリア・アルティス」という金メダルを彼女の首にかけました。ついで、佐藤忠男氏(日本映画大学学長)、大竹洋子氏(東京国際女性映画祭実行委員)、今村能氏(国立音楽大学、ポーランド国立歌劇場・フィルハーモニア客演指揮者)の順で「文化功労章」の勲章がそれぞれの胸に留められました。

すると突然「北海道ポーランド文化協会」という司会者の声が聞こえ、正直まさかという驚きと、やっぱりという納得の感情が交錯する中、意を決して壇上へ向かいました。というのも、安藤会長からの出席要請のメールには、そのような儀式のことなど一切触れられていなかったからです。



写真2 勲章を胸に付けた筆者と「文化功労章
グロリア・アルティス」受章の上田美佐子氏。
写真右は勲章。

壇上で同じように功労章を胸に付けて頂くと、会場から大きな拍手を頂きました。最後に、久山宏一氏（ポーランド語翻訳・通訳者）が受章して、文化功労章の金メダルは個人1名、勲章は個人4名と1団体が受章したという次第です。

後ほどの授章理由の説明では、文化功労章はあくまでもポーランド文化の普及・交流に貢献した個人の功績を称えて授与するもので、団体に対して与えるのはこの制度始まって以来初めてということでした。授章理由としては「北海道ポーランド文化協会が25年を超える長きにわたり、ポーラン

ドと日本の文化交流に果たした役割と功績はとても大きく貴重である」という主旨が述べられました。

授章式の後、受章者と挨拶を交わし=写真2=、またいろいろな人からもお祝いの言葉を頂きました。式には前駐日大使のヤドヴィガ・ロドヴィッチ氏も出席されており、とても丁寧にお祝いの言葉を頂いたことを覚えております。

その後、11月17日にシアターX主宰による上田氏の「グロリア・アルティス」受章記念パーティーに招待され、その席で改めて上田氏に祝辞を述べる機会がありました。私と上田さんとは、4年ほど前に私の兄（副会長・霜田千代麿）を通じて接点ができ、兄からは、グロトフスキーが逝去されたときに、シアターXで開催された記念シンポジウムに上田さんからご招待を受けたことがきっかけと聞いています。その後、国立能楽堂におけるヤドヴィガ・ロドヴィッチさんの創作能上演の際、およびご自身で企画された関連イベントなどでも何度かお目にかかり今日に至っています。

以上、授章式の概要を報告させて頂きました。

霜田 英麿

（北海道ポーランド文化協会東京事務所）

巨匠アンジェイ・ワイダ監督最新作 『ワレサ 連帯の男』

—5月3日（土）よりシアターキノで公開—



ポーランド映画界の巨匠アンジェイ・ワイダ監督が「連帯」運動の英雄レフ・ワレサの生涯を描いた伝記映画が、昨年10月ポーランドで公開され大絶賛されました。この作品が早くも5月3日から札幌のシアターキノで上映されます。

私も一足早く鑑賞しました。原題は『希望の男 Wałęsa. Człowiek z nadziei』。ワイダの名作『大理石の男』（1976）、『鉄の男』（1981）に続く、三部作の最終章と呼ぶに相応しい素晴らしい作品です。

高等教育も受けていない造船所の電気技師ワレサが歴史的な事件に巻き込まれ、社会主義体制をひっくり返すことになるま



でを描いています。家族思いの父親であり、妻の愚痴に頭を悩ませる、どこにでもいる普通の男が怒り、悩み、そして勝利をつかむ道程が、丹念に描かれています。同時に、社会背景は当時のアーカイヴ映像をふんだんに取り込み、短いシーンをテンポよくつないで、良質のサスペンスのような非常にスリリングな効果を生み出しています。

ベテラン俳優たちの素晴らしい演技、腰の据わったカメラワークなど、ポーランド映画界の底力を思い知らされる傑作です。ポーランド映画ファンは今年、見逃せない一本です。ぜひご覧ください。

佐光 伸一

※詳しくは、同封のチラシをご参照ください。

2013年ヴェネチア国際映画祭パシネッティ賞／2013年シカゴ国際映画祭最優秀男優賞受賞
2013年トロント国際映画祭正式出品作品

第27回定期総会報告



佐光事務局長・司会の尾形運営委員



安藤会長



懇親会風景

2013年11月8日(金)午後6時から第27回総会・懇親会が開かれました。以下、ご報告します。

第1号議案 2013年度事業報告

1. 第26回総会・懇親会 2012年11月3日(土) 11時30分から、ニューオータニイン札幌「北星の間」にて、参加者53名。
2. 例会
 - 1) 第63回例会 レクチャー・コンサート「21世紀のショパン像～『新書簡集』出版を祝って」講演:三浦洋、ピアノ演奏:坂田朋優、安田文子、高橋健一郎の各氏。2012年11月17日(土)14時から、北大情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室にて、参加者約80名。
 - 2) 第64回例会 「ジャズライブ de ポランスキー」出演者:Sza/Za[シヤ/ザ:パヴェウ・シヤムブルスキとパトリック・ザクロツキ]。同12月4日(火)19時から、札幌プラザ2・5にて、参加者約100名。
 - 3) 第65回例会 「ポーランド映画セレクションⅢ」2013年6月8/9日(土/日)9時30分から、札幌プラザ2・5にて、参加者のべ約400名。
 - 4) 第66回例会 「午後のポエジア」同6月29日(土)14時から、北大クラーク会館3階国際文化交流活動室にて、参加者約50名。
 - 5) 第67回例会 「マリア=マグダレナ・カチョル オルガンリサイタル with 松井亜樹～オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽」同8月16日(土)14時～、北大クラーク会館講堂にて、参加者約400名。
3. 会報「POLE」5回発行:第76号(2012年10月1日)、第77号(同12月1日)、第78号(2013年5月10日)、第79号(同8月1日)、第80号(同9月30日)

4. 後援事業

- 1) 「コルチャック先生講演と学びのタベ&パネル展」2012年11月20日(火)13時30分から、講師:タイス先生・塚本智宏先生、映画「コルチャック先生」上映、札幌エルプラ3Fホールにて
- 2) 松井亜樹ソプラノ・リサイタル(平成24年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「新進芸術家育成プロジェクト リサイタル・シリーズ」)2013年3月15日、札幌コンサートホール Kitaka 小ホールにて

5. 2013年度決算報告〈資料I〉ご参照

6. 2013年度監査報告

平成25年10月28日札幌エルプラザ内において、会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照会した結果、適正に処理されていることを確認致しました。

監査委員 小林 暁子、斎田 道子

第2号議案 2014年度事業計画

1. 第27回総会・懇親会 2013年11月8日(金)18時から、北大クラーク会館3階国際文化交流活動室にて
2. 例会・その他
 - 1) 第68回例会「午後のポエジア」2014年6月14日(土)14時から、会場は検討中
 - 2) 「講演会」等は随時
 - 3) 記念セミナー「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事——白老における記念碑建立に寄せて——」2013年10月20日(土)9時から、北大学術交流会館講堂にて



第 27 回総会・懇親会 2013 年 11 月 8 日 北大クラーク会館 3 階国際文化交流活動室にて

3. 会報「POLE」 3 回発行(2、5、9 月予定)

4. 後援事業

- 1) ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏会「ポーランド楽派を聴く～ショパンとルトスワフスキ～」2013 年 10 月 15 日(火)19 時から、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホールにて。講師：ズビグニェフ・スコヴロン教授、三浦洋氏との対談。演奏者：川染雅嗣、菊地秀夫、坂田朋優、高橋健一郎、谷本聡子、松井亜樹の各氏(五十音順)

5. 2014 年度予算書(資料Ⅱ)ご参照

第3号議案 2014 年度役員について

以下のとおり。下線は新任。

- ▶ 会長 安藤 厚
- ▶ 副会長 小笠原正明 霜田千代麿
- ▶ 運営委員 安藤むつみ 氏間多伊子
薄井豊美 大久保律子 尾形芳秀
栗原朋友子 越野 剛 小林美保
佐々木保子 高橋健一郎 富山信夫
塚本智宏 中島 洋 藤野知明
三浦 洋 アグニェシュカ・ポヒワ
ラファウ・ジェプカ
- ▶ 事務局長 佐光伸一
- ▶ 監査委員 小林暁子 斎田道子
- ▶ 副事務局長 栗原朋友子
- ▶ 事務局委員 ラファウ・ジェプカ
- ▶ 会計担当 氏間多伊子
- ▶ ポーレ編集委員 氏間多伊子 栗原朋友子
佐光伸一 ラファウ・ジェプカ
- ▶ 東京事務所 霜田英麿

第4号議案 会則改正について

会則改正：下線部を追加・修正する。

第 4 条 会の目的に賛同し、会則を承認する者は、だれでも会員となることができる。入会は、運営委員会がこれを承認する。会員は、個人会員および団体会員からなるものとする。

第 5 条 個人会員は、普通会費を納めるものとする。ただし、学生には会費を軽減することができる。また、本会の活動を維持するための寄付として、維持会費を納めることができるものとする。団体会員は、団体会費を納めるものとする。会費の額は別に定める。

(1987 年 10 月 2 日発効、(略)、2013 年 11 月 8 日改訂)

会費についての細則(新規)

1. 会則 5 条にもとづき、会費の額は以下のとおりとする。
(個人会員)
(1) 普通会費 年額 3,000 円
(2) 学生会費 年額 1,500 円
(3) 維持会費 普通会費に加えて年額 1 口 1,000 円以上(任意の寄付)
(団体会員)
(4) 団体会費 年額 1 口 10,000 円以上
2. 会費は、会計年度のはじめ(毎年 10 月)に納入するのを原則とする。
3. 年度途中に入会する場合には、初年度会費を、2-5 月入会は 2,000 円、6-9 月は 1,000 円に軽減することができる。
(2013 年 11 月 8 日制定)
以上

資料Ⅰ

2013年度 収支決算書 (自2012年10月1日～至2013年9月30日)

【収入の部】	予 算	決 算	内 訳	(単位：円)
会費	180,000	246,680	全額の95%	
演奏部会基金取崩	150,000	150,000		
寄付金		15,100	尾形・霜田	
その他	0	54		
小 計	330,000	411,834		
繰越金	76,974	76,974	郵便振替 5,320円 現金 71,654円	
合 計	406,974	488,808		
【支出の部】				
事業費	150,000	162,875	第63回<レクコン>2.7万、第64回<ジャズ>1.2万、第65回<映画>4.2万、第66回<朗読>1万、後援事業<コルチャック>2万、第67回<リサイタル>5万	
25周年記念事業費	150,000	90,122	第26回<総会・祝賀会>	
連絡費	35,000	61,640	ポーレ発送・はがき・切手他	
編集費	25,000	23,931	ポーレ制作費(76-80号)5回	
会合費	20,000	25,825	運営委員会	
事務費	15,000	23,597	トナー・文具	
予備費	11,974	53,725	HP0.7万、BD・ドライブ3.8万、ケーブル、花束	
小 計	406,974	441,715		
繰越金	0	47,093	郵便振替 10,000円、 現金 37,093円	
合 計	406,974	488,808		

資料Ⅱ

2014年度 会計予算書 (自2013年10月1日～至2014年9月30日)

【収入の部】	前年度決算	予 算	内 訳	(単位：円)
会 費	246,680	200,000		
演奏部会基金取崩	150,000	0		
寄付金	15,100	30,000		
その他	54	50	銀行利息	
小 計	411,834	230,050		
繰越金	76,974	47,093		
合 計	488,808	277,143		
【支出の部】				
事業費	162,875	100,000	第27回<総会>2万<後援事業>ルトスワフスキ2万 第68回<朗読会>1万<その他>5万	
25周年記念事業費	90,122	0		
連絡費	61,640	50,000	ポーレ発送・はがき・切手他	
編集費	23,931	20,000	ポーレ制作費等	
会合費	25,825	20,000	運営委員会他	
事務費	23,597	25,000	電話料金・文具他	
予備費	53,725	62,143		
小 計	441,715	277,143		
繰越金	47,093	0		
合 計	488,808	277,143		

演奏部会基金 (2014年9月30日現在)

	収入の部	支出の部	備 考	(単位：円)
繰入金	357,371		2012年9月1日、北洋銀行(普)に開設	
取崩		150,000	2013年度「一般会計」繰り入れ	
残高		207,371		



写真 1a (左から) 安藤会長、コザチェフスキ駐日大使、小林監査委員、氏間運営委員

ポーランドの アイヌ研究者 ピウスツキ 記念

昨年10月19～20日に、ブロンスワフ・ピウスツキ顕彰事業(胸像除幕式と記念セミナー)が実施されました。北海道ポーランド文化協会には、20日の記念セミナー主催者の一翼を担っていただき、また多くの会員の方々の御支援を賜りました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

白老のアイヌ民族博物館で19日に举行されたブロンズ胸像除幕式=写真1a=には、寄贈主のポーランド側からB.ズドロイェフスキ文化・国家遺産相、C.コザチェフスキ大使、J.ロドヴィッチ=チェホフスカ前大使、M.ウーチュコ・ポーランド広報文化センター長、ピウスツキ家からは3人の孫(木村和保氏、作家のW.コヴァルスキ氏、ユゼフ・ピウスツキ博物館長のK.ヤラチェフスキ氏)が列席されました。

20日の記念セミナー=写真2a=では、200名を超す人々が北大の学術交流会館に参集されました。

ブロンスワフ・ピウスツキ=写真1b=は1903年夏の第2回来道の際、白老に1ヵ月ほど滞在しアイヌの人たちと胸襟を開いて交流しましたが、地元の白老ではその記憶がまったく伝承されていません。そこで今回の記念碑建立が、ピウスツキと白老の絆の新たな出発点となることが期待されます。

1980年代前半の日本では「ピウスツキの蠟管」が当時の最先端技術を駆使して「90年ぶりに再生」され、全国的な話題になりました。この「蠟管ブーム」の最大の功労者は、音声再生を実現した科学技術の粋(これについては朝倉利光氏=写真2b=に報告していただきました)もさることながら、むしろ再生過程とその周辺を記録して全国津々浦々の茶の間に届けたテレビ報道だったでしょう。セミナーでは、ブームの火付け役となり、2本の関連番組を製作された山岸嵩氏(元NHKチーフディレクター)=写真2b=に取材の裏話を披瀝してもらい、端なくも、日本におけるピウスツキ研究の生成過程を跡づけていただくことになりました。

「蠟管」プロジェクトの終幕として、1985年9月には「ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化」と銘打つ国際シンポジウムが、今回の記念セミナーと同じ北大学術交流会館に内外の研究者148名を結集して開催されました。同シンポジウムは、アイヌ文化を謳った大型国際集会としては世界初の試みでした。ピウスツキにかかわる国際集会はその後も継承され、1991年の第2回は「ソ連」のユジノ・サハリンスク、1999年の第3回はポーランドの古都クラクフ、ザコパネと、ピウスツキゆかりの町を巡回しました。爾来15年が経過し、近



写真 1b ポーランド政府から白老町「アイヌ民族博物館」に寄贈された胸像。台座にはポーランド語、日本語、アイヌ語、英語で次の銘が刻まれている。

ブロンスワフ・ピウスツキ
1866-1918
ポーランド流刑者、卓越せる民族学者
アイヌと極東先住民研究の開拓者
1903年8月
当地白老に滞在、研究に勤しんだ

の胸像除幕式と セミナー

い将来には第4回集会在世界のどこかで催されることが強く囑望されます。今般の事業は市民を対象とする記念セミナーという形式でしたが、そのような国際的ピウスツキ研究の一端を担うものとして位置づけられます。

日本におけるピウスツキ研究の第1世代は軒並みに高齢化して、すでに鬼籍に入られた方も少なくありません。第1世代の掲げた篝火が第2、第3世代によって首尾よく引き継がれるよう願ってやみません。その意味では、今回の事業が若い人々の関心を些かなりとも喚起できたとすれば、まことに喜ばしい限りです。

ポーランドの映像作家ワルデマル・チェホフスキ氏＝写真3＝(ロドヴィッチ＝チェホフスカ前大使の夫君)は除幕式の前々日に白老に入り、式の前日から記念セミナーの翌々日まで事業の一部始終を映像に収めて帰国されました。記録映像の一部はインターネットで公開されています。氏はピウスツキ没後百年に向けてその生涯の追跡調査に挑み、その事績を掘り起こして映像化する構想を温めておられます。この記録映画製作のため、同氏は国際交流基金の研究助成に応募されたので、数年後には飛びきり斬新な視聴覚情報によるピウスツキ評伝に接することができそうです。氏の初志貫徹を心から願う次第です。

北海道ポーランド文化協会には記念冊子『ピウスツキの仕事』＝写真4＝の編集もしていただき、除幕式と記念セミナーの参加者に配布することができました。同冊子はその後、増補修正版が北大ホームページのHUSCAPにも収録されています。より包括的で、より正確な情報を希望される方は、どうかHUSCAP版もご参照ください。

井上 紘一

2014年2月23日、札幌にて

『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：
白老における記念碑の序幕に寄せて』(HUSCAP版)
WEB 検索:「ピウスツキの仕事」

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php>

※冊子をご希望の方は事務局(1ページ目左上参照)にお問い合わせください。



写真2a 記念セミナー会場風景



写真2b 第2部のセミナー講師(左から)井上紘一、朝倉利光、村崎恭子、山岸 嵩の各氏



写真3 銅像建立式典の安全祈願「カムイノミ」を取材するチェホフスキ監督(前列一番手前)。その映像はこちらから ↓ ご覧になれます。YouTube 《 polski pomnik na Hokkaido 》
<http://www.youtube.com/watch?v=apYUmJl2EfU&feature=youtu.be>

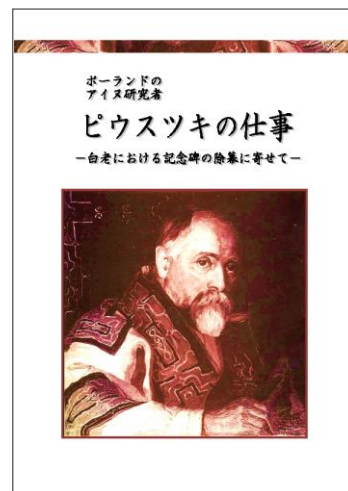


写真4 記念冊子『ピウスツキの仕事』A4判142頁

写真・尾形 芳秀



ポーランド楽派を聴く ～ショパンとルトスワフスキ～ (2013年10月15日開催) を企画して



昨2013年はポーランドの生んだ秀でた作曲家
ヴィトルト・ルトスワフスキの生誕100周年でした。
これを記念して、ポーランド広報文化センターの
支援を受け、ルトスワフスキ研究の第一人者でワ
ルシャワ大学教授のズヴィグニェフ・スコヴロン氏
を迎えて講演と演奏の集いを企画しました。

ルトスワフスキはポーランド国内だけでなく、世
界的にも戦後の現代音楽を代表する素晴らしい
作曲家ですが、札幌では認知度はあまり高くあり
ません。お客様が集まるのかと不安でしたが、幸
いスコヴロン教授は、2012年に日本で翻訳が出
版された『ショパン全書簡 1816-1831年』(岩波
書店)の編集にも関わられたショパン研究者でも
あり、2012年には東京でその書簡集について講
演を行い、大変素晴らしい内容だったと聞きました。
そこで前半はショパン書簡集をめぐるスコヴロ
ン教授と当協会会員の三浦洋氏の対談=写真1=、
後半はスコヴロン先生にルトスワフスキについて
の講演をお願いしました。

また当協会の会員の中には素晴らしい音楽家
が多数いらっしゃいますので、前半にショパン、
後半にルトスワフスキ作品の演奏を加えて=写真2
=「ポーランド楽派を聴く」と銘打ったレクチャーコ
ンサートとしました。

会場は札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホ
ールをお借りしました。当協会でするのは初めて
でしたが、二階天井まで吹き抜けで音響が素晴
らしく、お客様との距離も近く、とても親密な雰
囲気で、講演と演奏には打ってつけでした。

当日は、前後半ともに筆者がポーランド語から通
訳をしました。当日まではとても緊張しましたが、ス
コヴロン先生に実際にお会いすると、非常に深み
のある内容を平易なことばで情熱を持って語られ、
まるで音楽についての優れた書物の朗読を聴い
ているようで、非常に理解し易く、ホッとしました。



写真1 (対談)三浦氏(左)とスコヴロン氏(右)

前半はポーランド、日本を代表するショパン研
究者の対談とあって、とても刺激的でした。スコヴ
ロン先生は、ショパンの書簡の原本は紛失したも
のが多く非常に苦勞していること、編集には現在
フランスで刊行中のジョルジュ・サンド書簡集の編
集方針を参考にしていることなどを語られました。
三浦氏からの、書簡集の編集によりスコヴロン先
生のショパン像は変わったかという質問に対して、
先生は、ショパン像に変化はないが、当時の歴史
・社会背景を知ることによってショパンに対する理解が
深まったこと、特にショパンは作曲家としては歴史
上初めて近代的教育制度の恩恵を受け、大学で
文学や哲学などの一般教養を学んだことの重要
性を強調されました。

この書簡集は全3巻で、出版されたのはまだ1
巻目のみですが、現在編集中の2巻目は次のショ
パンコンクールが行われる2015年、3巻目はその
次のショパンコンクールがある2020年に出版を目
指しているそうです。

つづいて当協会会員の松井亜樹さんのソプラノ
と、高橋健一郎さんのピアノ伴奏で、ショパンの歌
曲「いとしい人」ほか、坂田朋優さんのピアノで「バ
ラード第3番」が演奏されました。スコヴロン先生
は、札幌で聴くショパン作品を堪能された様子で、



イベント後に「演奏のレベルの高さに非常に感銘を受けた」とおっしゃっていました。

後半はルトスワフスキについての講演です。今回の日本講演旅行では、札幌以外はすべて英語原稿で、札幌のために英語からポーランド語に訳し直されたそうです。事前にいただいた原稿は、通訳なしでも90分はかかる力作でしたが、後半は通訳、演奏を入れて50分で、話されたかったことの半分もお話しいただけず、全体の構成、時間配分など、企画には多くの反省点が残りました。

講演では、スコヴロン先生は、ルトスワフスキ作品の抜粋をCDで紹介しながら、彼の創作活動の発展について解説されました。調性音楽に代わる音楽言語を探求したこと、1956年のハンガリーにおける反共産主義運動の影響で、この時期はポーランドでも文化政策が緩和化し、それがルトスワフスキをはじめペンデレツキやグレツキなど（「ポーランド楽派」と呼ばれる）優れた音楽家を生んだこと、当時流行していた「偶然性の音楽」という理念から、ルトスワフスキは「管理された偶然性」という独自の作曲技法を生み出し、それは決められた時間の範囲内で、決められた音の高さを保ちながら、自由なリズムで演奏するという手法であったことなどを、非常に印象深く話されました。

ルトスワフスキ作品の演奏では、前半に引き続き松井亜樹さんと高橋健一郎さんがユリアン・トゥヴィムの詩による歌曲を2曲演奏しました。

また当協会会員、昭和音楽大学教授でピアニストの川染雅嗣氏が東京から駆けつけ「ポーランドの民謡風メロディ」の演奏を聞かせてくださいました。川染先生はポーランド留学中にルトスワフスキ

自身の演奏を聴かれたことがあるそうです。本場で研鑽を積まれた先生の、ポーランド音楽やルトスワフスキに対する深い理解に基づいた演奏に、会場全体が魅了されました。

最後に会場の札幌大谷大学のピアノ科主任教授で、当協会会員のピアニスト谷本聡子氏とクラリネットの菊地秀夫氏により「舞踏前奏曲」が演奏されました。複雑なリズムの難曲を、曲の魅力を最大限に伝えながら見事に演奏しきる熱演でした。

講演の最後にスコヴロン先生は、ルトスワフスキを含め現代音楽を私たちが理解する方法について、非常に印象深いことを述べられました。現代音楽は外国語の学習のようなもので、最初は何の意味も持たない音声の流れにしか聞こえないが、文法や語彙を習得するにつれ、徐々に意味が理解できるというのです。現代音楽も、その作曲技法、構成などの知識を得て接すると、はじめて理解に達すると強調されました。音楽の聴き手の側にもそれを受け容れるための準備が必要であるという考えには、非常に共感できました。

ルトスワフスキというなじみの薄い作曲家に関するイベントにもかかわらず、当日は約80名の方が会場に足を運んでくださいました。ご来場いただいたお客様、スコヴロン先生、三浦先生、演奏者の皆さま、そして当日お手伝いいただいたスタッフのみなさんに、感謝の念でいっぱいです。本当にありがとうございました。

佐光 伸一（「W.ルトスワフスキ生誕100周年記念講演&演奏会」実行委員）

※当日配布資料をご希望の方は事務局(1ページ目左上参照)にお問い合わせください。

ズビグニェフ・スコヴロン教授を迎えてヴィトルト・ルトスワフスキ生誕100周年記念講演&演奏会



写真2 演奏者（左から）川染雅嗣 高橋健一郎 菊地秀夫 坂田朋優 谷本聡子 松井亜樹の各氏
札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホールにて



駐日ポーランド大使の来札



——さっぽろ雪まつりに合わせて
北海道知事らを表敬訪問——



ツィリル・コザチェフスキ
駐日ポーランド共和国特命全権大使

2月4日から6日までコザチェフスキ駐日ポーランド大使が来札されました。今回は大使館の経済・科学技術担当のトマシュ・ヤムロズ一等書記官が随行しました。大使は就任から約1年半の間にすでに札幌を4回も訪問されています。特に去年11月のピウスツキ顕彰事業のあとは、12月にご家族とプライベートで、そして今回と、ほぼ毎月のように訪れている、札幌びいきです。筆者は毎回お出迎えているので、空港では気さくに手を振っていただきました。

今回の目的は、さっぽろ雪まつりの開会式に出席し、ポーランドの雪像チームを激励することと、高橋はるみ北海道知事、山口圭三北海道大学総長ら、北海道の行政、アカデミズムのトップと会談し、ポーランドと北海道との関係の基盤をより強固なものにすることでした。

一行は5日早朝、北海道大学を訪問し、山口総長=写真1=と会談し、今後の相互交流の促進について話し合いました。北大は世界中の多くの大学と交流協定を結んでいます。ポーランドの大学との協定はまだありません。今後、北大とポーランドの大学で協定が結ばれ単位の互換などが実現すれば、ポーランドに留学する学生がもっと増え、ポーランド語学習熱も高まるのではと、ポーランド語教師の筆者は勝手に期待を膨らませました。

次はスラブ研究センターを訪問しました。宇山センター長をはじめ、東欧研究のスタッフ=写真2=が中心となり迎えてくださいました。ヤムロズ書記官は、言語学の野町准教授のワルシャワでの日本語の教え子ということで、旧交を温めていました。大使は、ポーランド研究に携わる院生・研究者に対しポーランド政府は全面的にバックアップするので、ぜひ連絡してほしいと強調しました。センター図書室の視察では、ポーランドの新聞・雑誌の最新号が



写真1 山口圭三北海道大学総長(左から3人目)を表敬訪問したコザチェフスキ大使(右から3人目)



写真2 (左から)野町素己、望月哲男、宇山智彦、大使、筆者、家田修の各氏



写真3 大使と高橋はるみ北海道知事

閲覧できることにとても驚いている様子でした。

午後は樺太の残留・亡命ポーランド人の記録が残る道庁赤レンガ庁舎・樺太関係資料館も視察し、尾形運営委員のご案内で熱心に展示をご覧になりました。特にヤムロズ氏は日本史にたいへんご興味があり、尾形さんを質問攻めにしていました。

そのあと一行は高橋北海道知事=写真 3=を表敬訪問しました。高橋知事がポーランド大使と会談するのは、4年前のロドヴィッチ前大使に続き2回目です。この4年間を振り返ると、当協会の数々のビッグイベントや大使館、広報文化センタースタッフの来札など、ポーランドとの交流が本当に活発になったと感慨もひとしおです。これもひとえに協会

のみなさまのご協力・ご理解のたまものです。今後とも引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

知事との会談のあと一行は、夕方の便で東京に戻られました。別れ際に、大使は北海道ポーランド文化協会への支援は惜しまないと述べ、今回の訪問での数々の出会いを“good meeting”と表現して、北海道を後にされました。

なお、大使から会員のみなさまにと、大使館発行のカレンダーを30部ことづかっています。ポーランドの歴史をアニメで表現した素晴らしいものです。ご希望の方は事務局(1ページ目左上参照)にご連絡ください。先着順でお送りいたします。

文・佐光 伸一、写真・尾形 芳秀

——国際雪像コンクールの ポーランドチームを激励——

さっぽろ雪まつり第41回国際雪像コンクールに、ポーランドから2回目となる女性3人のチーム「シュクラスカ・ポレンバ(Szklarska Poreba)」が参加し、大使が激励=写真 4=しました。彼女たちはポーランド南西部の、チェコと国境を接するドルヌイ・シロンスク県から派遣されたチームで、リーダーのマリア・ミシュタ(幼稚園長)と、メンバーのヨアンナ・スヴェフ(ブツワフの教会や古い建物の修復・記念物管理官)、ユスティナ・グラフ(OPT社のプライベート写真スクールの学生でスキースクールの事務員)の3人です。

雪像は「クルコノシエ山を見守る女神像」=写真 5=という、大変精密な女性チームらしい作品で、前回より完成度も高く仕上がりましたが、全体に他国より少し小さいせいか、残念ながら入賞は逃しました。

凍って固まった雪のプロック(3m×3m)を女性3人で加工するのは大変な重労働だったと思います。その間にも内外の観光客から次々と話しかけられ、写真を一緒にという要望も多く、対応に大忙しでした。親善友好の点では、他のチームよりも高く評価されたと思われます。

文/写真・尾形 芳秀



写真4 雪像チームを激励する大使



写真5 完成した女神像



変わりゆくポーランドの山歩き

津田 晃岐

私はこの 6 年間、ポーランドの西部のポズナン市に住んでいるが、かつて北海道大学で学んだことから、札幌とも縁が深い。現在、ポズナンのアダム・ミツキェヴィチ大学で学びつつ教えながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどう変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められ、喜んで筆を執った。

1. レクリエーション

ポーランドの山岳地帯は国土の南部に集中し、ウクライナ、スロヴァキア、チェコとの国境を成している。有名な固有名を挙げれば、東から、ベスキディ山地 Beskidy およびタトラ山脈 Tatry (ともにカルパティア山脈の一部に数えられる)、スデティ山地 Sudety などがある。

ベスキディ山地は標高 1000 メートル超の山々が連なり、東端ではスロヴァキアと、西端ではチェコとの国境を成す。「ベスキディ山地」というのは、いくつもの山地の集まりの総称で、個々の山地はそれぞれの固有名を持っている。マグラ国立公園から西へ延び、タトラ山脈の北を通過して、ビールで有名な町ジヴィエツまで続く。山地内には他にも複数の国立公園がある。最高峰は 1725 メートルのバビヤ・グラ山 Babia Góra (「姥山」の意味) で、俗にディアブラク山 Diablak (「悪魔の峰」の意味) とも呼ばれる。

タトラ山脈は標高 2000 メートルを超える山々が連なり、スロヴァキアとの国境を成している。麓にあるザコパネ市は、ウィンタースポーツの中心地として、また自然豊かな国立公園としても有名である。山脈の最高峰はスロヴァキア領にあるが、ポーランド側の最高峰は 2499 メートルのリスィ山 Rysy (「引っ掻き傷」の意味) である。

スデティ山地は標高 1500 メートル前後の山々が連なり、チェコとの国境を成している。「スデティ山地」とは、それぞれに固有名を持った山地を集めた総称で、複数の国立公園が山地内に存在する。最高峰は 1602 メートルのシニェシュカ山 Śnieżka (「雪玉」の意味) である。

どの山地・山脈にも 3000 メートルを超える山はないが、深い森だけでなく、岩場あり、断崖あ

りと、険しい地形に富んでいる。しかし、ポーランド人の場合、山の険しさが神聖さと結びついたり、山の険しさに厳かさを感じたりすることは、あまりないようである。

数年前、ポーランドの教育雑誌『ポロニスティカ Polonistyka』に日本の「山」の文化について記事を書いたことがある。山岳信仰が根強く残る日本では、登山は当然「巡礼」のような意味合いを持つ。だから、山頂に社殿が建てられたり、御来光に手を合せたりすることに何の不思議もない。

一方、ポーランドをはじめヨーロッパでは、「山」は「拝む」ものではなく、何よりもまず「挑む」ものであり、ある山に「登頂」ということは、その山を「征服」することにほかならない。もちろん、みな「登頂」にこだわるわけではない。それほど野心のない、ごく普通の山好きにとっては、「山」は「拝む」ものでも「挑む」ものでもなく、「歩く」もの、「楽しむ」ものである。山に「登る」というより、山を「歩く」のである。そして何よりも「楽しむ」ために山へ行くのである。トレッキングにハイキング、それからスキー、いずれもレクリエーションの場である。きれいな空気を吸い、体を動かし、気分をリフレッシュさせるのである。

とはいえ、ポーランド人の精神文化と「山」はまったく無縁ではない。ポーランドでは、夏に青少年少女たちがグループで(もちろん、監督者とともに)山岳地へ出かけ、一緒に山歩きをしたり、キャンプをしたりする。また、学生同士で手頃な山小屋を借り切って夏休みを過ごすこともある。もちろん、夏山での避暑は若者たちに限らないが、特に寝食を共にして友情を育んだり、共同生活を通して人間として成長したりするという、若者の涵養の場としての「山」もポーランドの文化の中にはある。



テトマイエル

また、山岳地方は独自の文化を培ってきた。ベスキディ山地やタトラ山脈を舞台にした文学作品も少なくない。独特な文化に魅せられ、あるいはその中で育った作家も多い。「実証主義」時代のリアリズム作家マリア・コノプ

ニツカ Maria Konopnicka (1842-1910)と、両大戦間期の詩人エミル・ゼガドゥオヴィチ Emil Zegadłowicz (1888-1941)は、どちらもベスキディ山地ゆかりの文人である。また「若きポーランド」時代の詩人・作家カジミェシュ・プシエルヴァー＝テトマイエル Kazimierz Przerwa-Tetmajer (1865-1940)は「タトラの詩人」とも呼ばれる。

2. 「行楽歌」

今年のさっぽろ雪まつりの雪像作りにシュクラルスカ・ポレンバ Szklarska Poręba の人たちが参加したという。彼らの故郷も山岳地にあり、チェコとの国境沿い、ステティ山地の一部を成すカルコノシェ山地 Karkonosze の麓に位置する。



シュクラルスカ・ポレンバ

この町には、山岳地ならではの山歩きと結びついた面白い行事がある。毎年、夏に「ポーランド全国学生歌謡行楽交換会 Ogólnopolska Turystyczna Giełda Piosenki Studenckiej」と呼ばれる「行楽歌 piosenka turystyczna」の音楽祭が開かれるのだ。出演者に出演料は支払われず、入場は無料という、完全に非商業的な野外音楽祭で、演奏者は仮設テントの下の舞台上で演奏し、聴衆の頭の上を覆うものは、もちろん何もない。それどころか、聴衆は各自テントと寝袋持参で聴きに来る。この音楽祭は 1968 年以来、今でも続いている。

ポーランドには「歌唱詩 poezja śpiewana」という音楽ジャンルがある。それは韻文に曲を付けて歌うもので、時には歴史上の大詩人の作品に曲

を付けて歌われることもあれば、現代のシンガー・ソングライターのオリジナル曲の場合もある。シュクラルスカ・ポレンバの音楽祭で歌われる「行楽歌」もこの「歌唱詩」に数えられるが、主にハイキングやキャンプファイヤーの際に歌われ、レクリエーション・ソングといったところだろうか。「行楽歌」は、多くは若者たちによって歌われるため「学生歌謡 piosenka studencka」とも呼ばれる。

1971 年の音楽祭では「歌唱詩」の流れを汲む音楽グループ「ヴォルナ・グルパ・ブコヴィナ Wolna Grupa Bukowina」（「自由な集団・ブナ林」の意味）がデビューした。このグループは特に「行楽歌」をよく歌い、1985 年まで活動した。初期の代表曲「家の牧歌 Sielanka o domu」はこの音楽ジャンルの雰囲気をととてもよく伝えている。



ヴォルナ・グルパ・ブコヴィナ

昼と夜を招こう、
四方の風を招こう。
みんなにドアは開かれてるから、
誰かが最初の音を鳴らせば、
山に向かってコンサートをしよう。
ブナの季節の香りのする
演奏が壁に染みこんで、
疲れた放浪者たちを
音楽で休ませるだろう。
だって、そんなのが僕の家だから。
だって、そんなのが僕の家だから。
(リフレイン) 僕は探す、探さなきゃ、
ギターとペンとで家を。
僕の上には山が空のように、
僕の上には空が山のように。

3. 「巡礼」

先日カルコノシェ山地の麓の町クシェシュフ Krzeszów へ行く機会があった。クシェシュフは、シュクラルスカ・ポレンバから東へ 50 キロメートルほどのところにあり、ちょうどカルコノシェ山地を間に挟んでいる感じである。

クシェシュフには、中世以来のシトー会修道

院がある。シトー会は、カトリック教会最古のベネディクト修道会から11世紀に派生したが、戒律の厳守と清貧の生活、労働の尊重を特徴とした。シトー会士たちは進んで荒地に定住し、みずから開墾作業に従事し、土地を耕しながら農場を経営し、自給自足の生活をした。また近隣の農民たちを指導し、新しい農法の普及にも貢献した。クシエシュフでも、修道士たちは近隣の領主や農民たちと協力し、産業と文化の向上を図った。その結果、諸侯や領民たちから多くの寄進を受け、修道院はシロンスク地方最大の農地を持つようになり、クシエシュフは「門前町」ならぬ「修道院町」として発展した。

修道院の建物は、山地の中でさらに一段小高い丘の上にある。修道院は広大な敷地と、教会、礼拝堂、その他の多くの施設から成り、「恵みの聖母」と呼ばれるイコンが教会堂の中央祭壇を飾っている。このイコンは、13世紀前半に遡る、

ポーランド最古の聖母マリアの肖像だという。そしてイコンの名から、クシエシュフの町自体も「恵みの聖母の聖地」と呼ばれている。修道院は戦後に閉鎖され、今は修道士はいない。2004年、修道院の建造物群は国の「歴史記念物 Pomnik Historii」に認定された。

見学することができた教会堂や礼拝堂では、歴史の重みとともに厳かさが支配し、感動的だった。それよりも印象的だったのは、修道院の裏手の墓地である。それこそ質素な造りの墓石が幾列にも並び、すでに墓守をする者もいないのか、墓標が汚れたり、割れたりしている。しかし、そこに刻まれた名前を拾い読んでいくうち、今では知る人もなき彼らの人生と、今でも安らかに眠る彼らに思いを馳せ、その不思議な静けさに身も心も洗われる思いがした。山深い古の修道院への思いがけない「巡礼」となった。

つだ・てるみち

(ポズナン・アダム・ツキェヴィチ大学)

ソチ冬季五輪で ポーランドは 金メダル4個



津田さんのエッセイにもあるように、ポーランドの山岳地帯は南部の国境地帯に限られるので、スキーなどのウィンタースポーツはそれほど盛んではない。そのため、これまでポーランドが冬季オリンピックで獲得した金メダルはわずかに2個であった。その最初の1つが、1972年の札幌オリンピックのスキージャンプ90m級で金メダルを取ったヴォイチェフ・フォルトゥナ選手だった。

そのあと2010年のバンクーバーオリンピックでクロスカントリーのユスティナ・コヴァルチックが金メダルを獲得するまで、フォルトゥナの金メダルがポーランドにとって唯一のものであった。

本号で紹介したコザチェフスキ大使やスコヴロン教授は、大倉山ジャンプ競技場にご案内すると、お二人ともジャンプ台や、博物館に展示されているフォルトゥナの金メダルを伝える新聞記事を熱心に写真に収めていた。

ところが今回のソチオリンピックで、ポーランドは何と一気に4つも金メダルを獲得した。日本人に一

番よく知られているのは、スキージャンプのノーマルヒルとラージヒル両方で金メダルを獲得したカミル・ストフ選手だろう。



ストフ選手はラージヒルで日本の葛西紀明選手と闘い、日本人にとってはとても悔しい結果となったが、ストフ選手のライバルとあって、ポーランドのメディアでも葛西選手は非常に大きく取り上げられた。41歳にもかかわらずワールドカップで総合3位につけており、2018年の平昌オリンピックを目指していることを紹介し、彼のジャンプはインスピレーションに満ちていたと絶賛している。

そのほかにも、バンクーバーに続きユスティナ・コヴァルチックがクロスカントリーで、二連覇を果たし、足の甲を骨折しながらも10kmを完走してポーランド女性の精神力の強さを示した。

そしてスピードスケート男子1500mではズヴィグニェフ・ブルトカが、ポーランド人としては初めてスピードスケートで金メダルを取った。ポーランドにはスピードスケート用のリンクがないため、ベルリンにまで行って練習したそうである。

大躍進を遂げたポーランドのウィンタースポーツ界、次のオリンピックでの活躍が楽しみである。

佐光 伸一



「幽玄の情景」

選と文＝ヤドヴィガ・ロドヴィッチ (能楽研究家)

— 井筒 — 十月

眺めは四方の秋の空
松の声のみ聞ゆれども
嵐はいつくとも定めなき世の夢心

ようやく秋が訪れ、古刹の上に静かに月が現れる。深い井戸の水面に映る小さな光はなに？そこに立つは男か女か？静寂の中、動いている。ふたつの月がみつめあう。夜空の月と、水面の月。ひとつは空高く身動きもせず、ひとつははるか水中で揺らめいて。暗い夜のふたつの光は共にあらねばならない。かつて共に揺らめいた男女が、いまはもういない。情熱も愛も、消えて、なくなった。井戸に映るひかりだけが舞っている。

ああ、井筒。生命の本質のような序之舞といい、何度見ても見飽きない。

— 龍田 — 十一月

紅葉の水に散り浮きて
綿を張れる如くなれば
渡らば綿中や絶えなんとなり

秋の女神は何処に？龍田に。

山は女神の身体。川は女神の血流。赤いモミジの葉、錦のように豪華な山の紅葉。落ち葉が川を埋め尽くし、肌のように広がっている。

水に浮かぶ落ち葉の上を歩けるだろうか？女神の身体を踏みつけることができるだろうか？ああ、命が秋の葉に血のように撒き散らされ、龍田の山を登っていく。太陽の下で、女神の水を飲みながら。靴を脱いで、水とモミジの葉に触れてごらん。中に入ってごらん。

— 葛城 — 十二月

天の香具山も向かひに見えたり
月白く雪白く
いずれも白砂の景色なれども

冬がきて、雪が降る。寒気と静寂が訪れる。葛城(つたかざら)に縛られたかの如く、陰に潜む人がいる。雪も、月も、老女の髪も白い。神秘に包まれた美、隠れた顔。枯れ木のように朽ちた身体が、鼓動を打つ心臓にしがみつく。



ロドヴィッチ前駐日ポーランド共和国大使による「家庭画報」の連載(2013年1月～12月号)を編集部の許可をえて改変し転載。

(写真左上から時計回りに) 10月号、11月号、12月号の同誌の表紙、ロドヴィッチ＝チェホフスカ前大使(右)と編者(左)。ピウスツキ胸像除幕式レセプション会場で再会。

2013.10.19、白老ポロコタンにて。

氏間多伊子(うじま・たいこ)

今後の活動予定

<例会>朗読会「午後のポエジア」 <予定>

日時：6月14日(土)
午後2時(開演30分前)
場所：未定



※ 出演者募集中(ポーランド関連の朗読)

<例会> 講演会<5月開催予定>

日時・場所：ただいま調整中

事務局の住所・電話番号が 変わりました!

住所 〒006-0006 札幌市手稲区西宮の沢
6条1丁目16-1-210 佐光伸一気付
北海道ポーランド文化協会事務局

電話 011-215-6696
FAX

ご寄付ありがとうございます

感謝をもってご芳名を掲載いたします。

- | | |
|-----------|----------|
| 安藤 厚(7) | 安藤むつみ(2) |
| 氏間多伊子(2) | 小笠原正明(4) |
| 尾形芳秀(2) | 小林暁子(3) |
| 霜田千代磨(12) | 霜田英磨(2) |
| 高橋健一郎(7) | 富山信夫(2) |
| 中島 洋(2) | 三浦 洋(1) |

※()内は口数:1口千円、五十音順、
敬称略、2013年9月~2014年3月

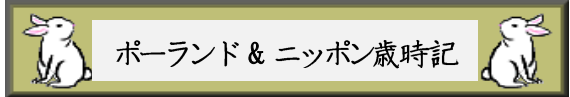
会費納入のお願い

4月から本年度下半期に入ります。会費未納の方は至急納入をお願いします。
当協会の活動は皆様の会費で賄われています。引き続きご理解とご支持をよろしくお願い致します。

【郵便振替口座】02740-5-19735

【名義】北海道ポーランド文化協会

※郵便局でATM扱いなら手数料無料



「俳檀」3月号から転載)

千代磨

(陽炎三春)

陽炎や万羽はばたくヴィスワ河

(仔馬晩春)

ポーランド大地ほろびず親子馬

(花杏晩春)

花杏昔王国幾山河



<岩見沢市在住。霜田千代磨さん>

1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協会会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。



新年とともに「春の整頓」の時期が来ました。書類、ノート、写真の整理をします。思い出が湧いてきます。家を整えると心も整います。新しいリズムとともに、これから始まることの準備となるでしょう。

co za pogoda
nowy rok sypie śniegiem
i nadziejami

新年や
天から雪と
希望降る

mróz rano chwycił
pozostawił po sobie
ślady na szybie

朝の窓
ガラスに咲いた
寒気かな

<ボズナン市在住。津田モニカさん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は4年前から詠みはじめる。

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 81 号 (2014 年 3 月)

目 次

霜田英麿「“ポーランド文化功労章”当協会が受章！」	1
佐光伸一「巨匠アンジェイ・ワイダ監督最新作『ワレサー連帯の男』—5月3日(土)より シアターキノで公開」	2
第 27 回 [2013-2014 年度] 定期総会報告 [2013.11.8]	3
井上紘一「プロニスワフ・ピウスツの胸像除幕式と記念セミナー」 [2013.10.19-20] [報告]	6
佐光伸一「ポーランド楽派を聴く～ショパンとルトスワフスキ (2013 年 10 月 15 日開催) を企画して」 [ズビグニェフ・スコヴロン教授を迎えて～ヴィトルト・ルトスワフスキ生 誕 100 周年記念講演&演奏会]	8
佐光伸一「駐日ポーランド大使の来札—さっぽろ雪まつりに合わせて北海道知事らを表敬訪 問」、尾形芳秀「国際雪像コンクールのポーランドチームを激励」	10
津田晃岐「ポーランドだより 11」 「変わりゆくポーランドの山歩き」	12
佐光伸一「ソチ冬季五輪でポーランドは金メダル4個」	14
ヤドヴィガ・ロドヴィチ「幽玄の情景 (3)」	15
霜田千代麿・津田モニカ「ポーランド&ニッポン歳時記」 / [事務局より] 今後の活動予定： 朗読会「午後のポエジア」、講演会	16